

ブレイクダンスの成立と動作の変容

スポーツ文化研究領域

5011A057-1 中山 徹

研究指導教員：杉山 千鶴 教授

1. 問題の所在と本研究の目的・方法

ストリートダンスには、ブレイクダンス、ロックダンス、ポップダンス、ハウスダンスなど動作や使用する音楽により、異なるジャンルがある。本研究ではブレイクダンスを対象とする。ブレイクダンスは1970年代にニューヨーク市のゲットーと呼ばれる貧困層の住む地域の子供たちによって作り出された。不満や喜びなどを表現したり[Cohen 1998:538]、またギャング同士の抗争の際に、銃やナイフなどの武器に代わる手段ともなった[Fresh 1984:20]。従ってブレイクダンスは相手とのダンスの優劣を競うといったバトルの要素が非常に強く、この点はブレイクダンスの特徴といえることができる。

また舞踊において「動作」は、その舞踊を構成する一要素であり、踊る上で大変重要である。

本研究では、このブレイクダンスの動作がどのような変容を遂げているのかを明らかにすることを目的とする。主に文献や論考を用いて考察するが、動作に関しては1980年代から2010年代までを10年ごとに区切り、各年代ごとに映像を用いて特徴を考察する。なお1980年代は映画「ビート・ストリート」中のバトルシーン、1990年代以降はブレイクダンスの世界大会

「BATTLE OF THE YEAR」決勝の映像を用いる。そして各年代の特徴を縦断的に考察し、その変容を明らかにする。

2. ヒップホップ・カルチャーとブレイクダンス

1970年代のニューヨーク市は経済危機に陥っていた。貧富の差は拡大したが、この差は人種的な区分と分かちがたく結びついていた。特にサウス・ブロンクス地区には市内にいた黒人やヒスパニック系が追いやられ、最貧困層の集まるスラム街と化した。失職した若者は、犯罪に手を染めギャングの一員となり、この地区を支配するようになる。また放火が横行したためサウス・ブロンクス地区は荒廃を極め、ギャング、廃墟、貧困による無法地帯と化した。

ヒップホップの誕生に大きな影響を与えたのはDJ クール・ハーク(1955-)である。彼は曲

の間奏部分(ブレイクス)で観客が盛り上がるのに気づき、同じレコードを2枚使用することで間奏を延長する技術を編み出し、ブレイク・ビーツという新たな楽曲を作った。そして野外パーティでは、DJのかけたブレイク・ビーツに乗ってMCが紹介やコメントを喋った。これがラップの始まりである。またダンサーはこのブレイク・ビーツで熱狂し、アクロバティックな動作やしゃがんだ状態のまま動作を行ったが、これがブレイクダンスの始まりである。このダンサーたちは先述のハークによってブレイク・ボーイ略してビーボーイ(B-boy)と名付けられた[Forman 2004:36]。またブレイクダンスはリンディ・ホップやカポエラなど、様々な場面における動作やダンスが取り入れられていた。グラフィティは、有色人種が疎外的な社会に対して自己を主張するツールであり、また野外パーティのステージ上に描かれたり、パーティの宣伝フライヤーなどにも用いられた。

アフリカ・バンバータ(1957-)は、これらの表現活動を目にし、犯罪や抗争に向けられるエネルギーをこれに注ぐことができればギャングは消滅し、無意味な殺人や犯罪は無くなると考え、1973年にギャングの暴力とドラッグに対抗するズールー・ネイションを組織した[ライト 2002:29]。

以上のDJ、ラップ、ブレイクダンス、グラフィティの4つをまとめて、ヒップホップあるいはヒップホップ・カルチャーと称する。

このヒップホップ・カルチャーにおいては、「オリジナリティ」の追求は重要であり、それが一つの精神性を形成している。

3. ブレイクダンスの動作と分析視点

ブレイクダンスの動作は「トップロック」「フットワーク」「パワームーブ」「フリーズ」の4つのカテゴリーから構成される。

このことから本研究では分析に際し、「ムーブの構成」、「パワームーブの種類と構成」、「ムーブと音楽の関連」の3つを視点と定めた。

4. 各年代における動作の特徴

「3.」で定めた3つの視点から各年代の特徴を考察した。

○1980年代

ムーブの構成は、トップロックに続けてフットワークあるいはパワームーブを行い、フリーズのないパターンが主流である。トップロックは単純なステップを用い、8×1カウントと短いことから、トップロックに続くフットワークやパワームーブに重点が置かれていることがわかる。

全体を通してリズムや強調された音に合わせることはなく、音楽との関連性よりも動作を通して各自の技術を見せることを優位としているといえる。

○1990年代

ムーブの構成は、トップロックからパワームーブへと続き、最後はフリーズを行わない。トップロックは単純なステップを用い8×1カウントと短く、したがってパワームーブに重点が置かれていることがわかる。

パワームーブは1980年代に行われていたものに加え、トーマスフレアやヘッドスピン、1990など特定の部位のみを接地した動作のほか、複数の動作を組み合わせたパターンも認められた。

全体を通してリズムや強調された音に合わせることはなく、1980年代と同様、技術を見せることが優先されていたといえる。

○2000年代

トップロックが様々なステップで行われ、最後はフリーズで締めるようになり、これによりムーブ全体が引き締められた。また、トップロックからフットワークもしくはパワームーブへ続き、最後はフリーズで締めるという流れが出来上がった。またフットワークでは複雑な印象を与えるような動作が見られた。

パワームーブでは新たにエアートラックスや2000などといった動作が認められた。

また、トップロックのほか、フットワークやワンハンドラビットでもリズムに合わせるようになり、音楽との関連が強まる傾向が認められる。

○2010年代

ムーブの構成は、2000年代と同様の流れをも

つが、パワームーブとフットワークを混ぜたり、フットワーク中心のものが主流となっている。パワームーブは2000年代と変わらないが、フットワークと組み合わせるため、パターンが多様化している。またフットワーク自体も2000年代より複雑化し、オリジナル性が認められる。全てのカテゴリーにおいてリズムに合う動作が見られ、音楽との調和が認められた。

5. 動作の変容

本研究を通して以下の点が明らかになった。

- ① 1980年代から2000年代にかけてパワームーブが発展し、2010年代にはフットワークとパワームーブを組み合わせるようになり、多様化した。ここにはヒップホップ・カルチャーの精神性が影響している。
- ② 1980年代から1990年代までは、意識の対象は相手チームのダンサーであったが2000年代以降はこれが観客に変わり、これを受けて流れのある構成となり、バトルの要素が減少した。それはブレイクダンスの普及が影響していると考えられる。
- ③ 1980年代から1990年代までは、音楽との関連はあまり認められなかったが、2000年代以降は音楽と関連した動作が増加している。これは先述の通り2000年代から観客を意識するようになったことのほか、ムーブ中のフットワークの割合が増加したことによるものと思われる。

<参考文献>

1. アラン・ライト (2002) 『ヒストリー・オブ・ヒストリー』: シンコ・ミュージック
2. Mr.Fresh (1984) 『Breakdancing』: Avon Books
3. Murray Forman, Mark Anthony Neal(2004) 『THAT' S THE JOINT! 』: Routledge
4. Selma Jeanne Cohen (1998) 『INTERNATIONAL ENCYCLOPEDIA OF DANCE Vol.1』: OXFORD UNIVERSITY
5. DVD『ビート・ストリート(BEAT STREET)』2007年: 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン
6. DVD『INTERNATIONAL BATTLE OF THE YEAR 2007』2007年: BACK SPIN & Kaleido Media
7. DVD『INTERNATIONAL BRAUN BATTLE OF THE YEAR 2011』2011年: SIX STEP GMBH
8. 「Battle Of The Year 1995」 Final Battle :
<http://www.youtube.com/watch?v=vK103uDW2aA>
http://www.youtube.com/watch?v=c_2SnYia2Sw